

心 の め ば え

アヤと過ごすジイジの日記

<20>

著者／牟田 泰三
挿絵／橋本 礼子

個人差

ジイジは、アヤという一人の幼い女の子に着目して観察を続けている。だから、普通の平均的な成長の部分もあれば、そうでもなくて普通の幼児よりはとても遅れていたり進んでいたりするところもあるかも知れない。

たくさんさんの幼児について観察を実施すれば、幼児全体の統計的な平均値のあたりが関心事となり、平均からずれたものはあまり問題にされないであろう。もちろん、平均から大きくずれるような言動をする子供は、研究対象として注目されることもある。このような平均値からのズレ具合は、統計学では標準偏差と呼ばれる量で表される。幼児の集団によつては、標準偏差が大きい集団もあれば、そうでなくて平均値に近い子が多い（標準偏差の小さい）集団もある。

幼児の間で個人差が顕著に出るのは、歩き始める時期とか、話し始める時期とかである。多くの親たちは、我が子が歩き始めるのを今か今かと待ちわびているし、また、お話ができれば大喜びしている。

中には、歩き始めが遅くて気になったり、お話ししてくれないので心配したりという場合もあるだろう。そんな差があつても、実は満4〜5歳ぐらいになると結局同じになっている。みんな標準偏差程度に収まっているのである。

アヤも歩き始めるのはかなり遅い方であつた。ハイハイは人並み程度であつたが、なかなか立ち上がってくれない。また、立ち上がりつても伝い歩きまではするが、どうしても歩き出そうとしない。手を離すのが怖いのだ。目線が高いと心許なくなるのだろう。もうすぐ2歳になろうというのに、まだ歩き出してくれない。

怖さの克服には勇気が必要である。ところが、アヤは、どうやらもう一つの方法を見つけ出したらしい。膝で立って歩き出したのである。いわゆる膝歩きだ。こうすれば確かに目線は低くなつて怖くはない。それに、ハイハイよりはずっと速く動き回ることができる。「窮すれば通ず」とか「必要は発明の母」とかいう格言があるが、全くその通りだと思う。人間って困り果てると知恵を絞り出すものだなあとあきれてしまう。生物はみなこうやって進出し、生き延びてきたのだろう。

親たちはこのまま歩けなくなるのではないかと、度が過ぎた心配をするが、大抵の幼児はそのうち歩き出すのだ。アヤもいつの間にかやら勇気を出して歩いていた。



ジイジの 気付き



標準偏差から大きくはみだした才能を元々持っている幼児は少ない。しかし、その後の磨き方によって、標準偏差をはるかに超える才能が出現する。

ジイジへのお便り

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。
weekly@pressnet.co.jp
「心のめばえ」係

プロフィール むた・たいぞう 1937年、福岡県生まれ。
九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、
理学博士。京都大学助手、助教授、広島大学教授、福
山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀
樹のことば」（丸善出版）、「電磁力学」（岩波書店）、「量子力
学」（裳華房）などがある。東広島市在住。